

使徒言行録 18 章 1 節～4 節。その後、パウロはアテネを去ってコリントへ行った。ここで、ポントス州出身のアキラというユダヤ人とその妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が全ユダヤ人をローマから退去させるようにと命令したので、最近イタリアから来たのである。パウロはこの二人を訪ね、職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その職業はテント造りであった。パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努めていた。

パウロはアテネを去り、60 kmほど南下し、コリントに来た。コリントはローマの植民都市で、交通の要所であった。パウロはアレオパゴスでアテネの哲学者たちに宣教する機会を得、言葉を尽くし、知恵を尽くして語った。彼らは、初めは興味を持って聞いていたが、パウロの宣教の本論である「死者の復活」を語ると、議論するに値しないと背を向けて立ち去った。ギリシアの哲学は、牢獄である体からの解放を求めており、復活して体に戻るなど、論外の愚かさだったのである。力を込めて説教したパウロは傷心の思いでコリントに来た。コリントに来た時のことを、コリント書（一）2 章 1 節～5 節で下記のように語っている。「兄弟たち、わたしもそちらに行ったとき、神の秘められた計画を宣べ伝えるのに優れた言葉や知恵を用いませんでした。なぜなら、わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていたからです。そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。わたしの言葉もわたしの宣教も、知恵にあふれた言葉によらず、“霊”と力の証明によるものでした。それは、あなたがたが人の知恵によってではなく、神の力によって信じるようになるためでした。」パウロは哲学者たちに手痛く拒絶され、衰弱し恐れに取りつかれ、不安を持ってコリントに来た。そこで、コリントでは、“霊”の力によって、十字架につけられたキリスト以外、何も語るまいと心に決めていた。アテネでの挫折を経験し、巧みな言葉や優れた知恵でなく、霊による宣教に転換したのである。主イエスの十字架の福音宣教に集中させ、人の知恵でなく、神の力によって信じるようになるためであった。1 章 18 節に「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」と書いているように、十字架の愚かさに神の力があるという宣教に徹したのである。パウロの二度目の回心と見ることができよう。

アキラというポントス州出身のディアスポラのユダヤ人の夫とその妻・プリスキラの夫婦が、クラウディウス皇帝が出したユダヤ人のローマからの追放命令を受け、コリントに下って来ていた。アキラはテント造りの職人であった。テントは羊の皮をなめして作る仕事で、汚れ、臭うので、卑しい職業とされていた。プリスキラはその名から、ローマ人の貴婦人と想像される。社会的に見れば、身分が不釣り合いな夫婦だが、信仰において結び合ったのではないかと思われる。夫婦はどこに住んでも、家庭を解放して集会（教会）を持ち、信者たちに信頼されていた。また、パウロの宣教も支えている。パウロは、この夫婦を訪ね、家に住み込んだ。そして、同業の二人と一緒にテント造りをした。コリントの宣教は、いわば底辺労働者として、十字架の低さに立った出発であった。

安息日には例によって、ユダヤ人の会堂に行き、ユダヤ人やギリシア人と論じ、主イエスの福音の説得に努めた。